早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　25号―1　二〇一七年九月

大江匡衡「早夏観曝布泉」考

―李白の受容を考える―

呂　天雯

はじめに

大江匡衡（九五二～一〇一二）の漢詩文集『江吏部集』には、彼が藤原道兼（九六一～九九五。以下は道兼）の粟田山荘の障子絵のために賦した一連の詠作が採録されている。[1] この一連の詠作を便宜上、仮に「粟田障子詩」と呼ぶ。『栄花物語』[2]、『続本朝通鑑』の記述によると、[3] 粟田山荘は道兼がいつか生まれてくる姫君のために、正暦年間（九九〇～九九四）粟田の地に営んだものである。姫君の教養を豊かにする調度として、障子を配し、その障子に名所絵を描かせ、歌人に歌を詠ませ、菅原輔正に漢詩人たちの秀作を撰集させた。

粟田障子絵に賦した和歌や漢詩文としては、現在、恵慶法師、平佑挙、匡衡らの和歌、[4] 紀斉名、高岳相如、藤原為時、匡衡らの漢詩が残されている。[5] とりわけ、恵慶法師の和歌と匡衡の漢詩はそれぞれ恵慶法師の和歌集『恵慶集』と、匡衡の漢詩文集『江吏部集』に収録され、ほぼ完全に伝えられている。恵慶法師の和歌連作と匡衡の漢詩連作に関する注釈研究は、すでに熊本守雄氏や木戸裕子氏によるものがある。[6] 一方で、連作個々の作品についてはなお研究する余地が残されていると考えられる。

本稿では、匡衡の粟田障子詩十五首の第五首「早夏観二曝布泉一」[7]（『江吏部集』第三十九番）を取り上げたい。その結句「疑是銀河落レ自レ天」は唐代詩人李白の「望二廬山瀑布一」其二の結句「疑是銀河落二九天一」に酷似している。匡衡のこの一首は平安中期における李白詩の受容を研究するのに好個の素材であると考えられる。その観点を加味して匡衡の「早夏観二曝布泉一」詩を分析し、中国と日本文学における「瀑布」の表現方法の異同も視野に入れ、匡衡の詩文における李白の受容を検討していきたい。

一　匡衡の粟田障子詩「早夏観二曝布泉一」について

詩題「早夏観二曝布泉一」により、匡衡が早夏の瀑布を詠じたことが分かる。匡衡と同じ障子絵に和歌を詠んだ恵慶法師は、

夏ぬのひきのたきみる人あり
夏衣すすみかてらに裁ちも着む千尋さらせる布引の滝

と詠じた。詞書によると、これは明らかに「夏」の「ぬのひきのたき」（布引の滝）を詠む作品である。「夏」という季節は匡衡の詩とも一致する。「布引の滝」は摂津国（現在の大阪府と兵庫県の一部）の名所であり、平安初期から貴族の遊覧の地として名高い。地理的には現在新幹線新神戸駅に近在する。恵慶法師の和歌の意は、千尋の布をさらしているような布引の滝で夏衣を涼みがてらに裁って着てみよう、とのことである。[8] 恵慶法師は「布引の滝」の「布」の語にかけ、「衣」と関連する縁語「裁つ」「着る」「千尋」「さらす」で、「布引の滝」のさらさら流れ落ちる様子を伝えている。匡衡が詠じた詩作にある「曝」の語は恵慶法師の一句の「さらせる」の語に通じると言えよう。

瀑布を布に見立てる表現方法は東晋の孫綽の「遊二天台山一賦並序」（『文選』巻十一）に見える。「遊二天台山一賦並序」には、

赤城霞起而建標　赤城　霞のごとく起りて標を建て
瀑布飛流以界道　瀑布　飛び流れて以て道を界す

とあり、天台山の中の絶景として、赤城山と瀑布を取りあげて詠出した。この句について、李善の注では『天台山図』を引用し、

天台山図曰、赤城山、天台之南門也。瀑布山、天台之西南峯。水従南巌懸注、望之如曳布。

天台山図に曰く、赤城山は、天台の南門なり。瀑布山は、天台の西南の峯なり。水は南巌より懸注し、之を望めば布を曳くが如し。

と記している。藏中しのぶ氏[9]によって明らかにされてきたように、天台山を詠じる孫綽の「遊二天台山一賦並序」は『懐風藻』以来の日本漢詩文に多大な影響を与えた。日本文学における瀑布の表現方法もそれなりに影響を受けたと考えられる。

さて、匡衡が「早夏観二曝布泉一」の中で、どのように瀑布を描いたのかについて確認しておきたい。

早夏観曝布泉（粟田障子作。十五首中其五）　早夏に曝布泉を観る（粟田障子作。十五首中その五）
閑望一条曝布泉　閑かに望む　一条の曝布泉
眼塵暗尽坐岩辺　眼塵暗に尽き　岩辺に坐す
穿雲倒瀉寒声竪　雲を穿ち倒に瀉ぎ　寒き声は竪つ
疑是銀河落自天　疑ふらくは是れ銀河の天より落つるかと

起句と承句では、粟田障子絵の人物が心静かに岩のふもとに坐って瀑布を眺めている場面が詠出されている。承句の「眼塵暗尽」とは瀑布によって、「眼塵」が知らないうちに洗い流されていたとの意である。ここの「眼塵」は目の中の塵の意から、転じて人の心を惑わす欲望の意で使われている。詩語としての「眼塵」は白居易の詩文以前に見いだせない。白居易の詩文には、

眼塵心垢見皆尽　眼塵　心垢　見れば皆尽き
不是秋池是道場　是れ秋池ならず是れ道場なり
（二八五二「秋池」同前）

との使用例が見られる。表現上から見れば、匡衡の承句の「眼塵暗尽」

は白居易の「秋池」詩の転句「眼塵心垢見皆尽」を踏まえて詠じたものではないかと考えられる。更に、匡衡の起句「閑望一条曝布泉」には、「閑望」の語が見られ、それも白居易の「秋池」の承句「水辺閑坐一縄床」の「閑坐」に意趣が通じていると言えよう。こうして見れば、瀑布に触発された匡衡は白居易の詩作「秋池」の発想と詩語を襲用したと考えられる。

転句では、匡衡は、瀑布が雲を穿って、寒さを感じさせる音を立てながら、逆さまに流れ落ちると詠じている。彼は「穿レ雲」「倒瀉」「寒声」の表現を通じて、まさしく自分が絵に身を置いたかのように視覚、聴覚などの身体機能を働かせ、瀑布のスケールの大きさを際立たせている。「倒瀉」は上から逆さまに注ぎかかる意であり、「寒声」は寒さを感じさせる声の意である。「倒瀉」「寒声」の詩語はそれぞれ単独で瀑布を形容する表現として詠み込まれることが多いが、一首の中に詠み込まれたのは、菅原道真の詠作「観二曝布水一」（二三三『菅家文草』）しか見られない。道真の「観二曝布水一」詩は、

銀河倒瀉落長空　銀河倒に瀉ぎて長空より落つ
恰似霜紈颺晩風　恰も霜紈の晩風に颺るに似たり
清濺寒声図不得　清らかに濺ぐ寒声　図すことを得ず
将聞二十八言中　将に聞かんとす　二十八言の中

とある。川口久雄氏は『菅家文草』における詩の配列によって、道真が詠じた瀑布はその前の詠作「衙後勧二諸僚友一共遊二南山一」に続き、「南山の山中の滝だろう」と指摘した。[10] これにより、道真は匡衡と違い、南山にある瀑布の実景を目にして詠じたと考えられる。彼は起句、承句で、瀑布は銀河のように空から流れ落ち、飛沫は白絹が夕風に吹きあおられているようであるという瀑布の有り様を描写し、転句、結句では絵によって表現できない瀑布の「寒声」を七言絶句の「二十八言」の中で聴きとれるように表わそうとの感慨を詠じた。

匡衡と道真の詩はいずれも瀑布を主題とするもので、「銀河」「倒瀉」「落」「寒声」といった詩語も共通している。道真の起句の「銀河倒瀉落二長空一」は言うまでもなく瀑布を「銀河」に譬えて詠じ、瀑布が空から流れ落ちることを表現している。これも前述した李白の「疑是銀河落二九天一」の詩句の影響を受けたのではないかと考えられる。「瀑布」をモチーフとする詩作の中で、「銀河」「倒瀉」「落」「寒声」といった表現を一首の中に詠み込んだ詩作はほかに見えないため、匡衡の転句は先行する道真の詩作「観二曝布水一」の影響を多分に受けた所詠と推測される。

前述したように、匡衡の「早夏観二曝布泉一」詩の結句は李白の絶句「望二廬山瀑布一」其二[11]を襲用した。したがって、匡衡と李白の詠作の関連について確認しておきたい。李白の詩は、

望廬山瀑布　其二　　廬山瀑布を望む　其の二
日照香爐生紫煙[12]　　日　香爐を照らし　紫煙を生ず
遥看瀑布掛長川[13]　　遥かに看る　瀑布の長川を掛くるを
飛流直下三千尺　　飛流　直下　三千尺
疑是銀河落九天[14]　　疑ふらくは是れ銀河の九天より落つるかと

とある。これは開元十四年（七二六）、二十六歳の李白が襄水、漢水を経由して金陵と揚州へ行く途中、廬山に登った時に廬山の瀑布を詠じた二首の連作の第二首目である。「望二廬山瀑布一」其一（以下は「其一」）は二十二句からなる五言古体詩である。第二首目の絶句では、李白は紫色の靄がかかる香炉峰から見た、勢いよく「直下」する「三千尺」の瀑布の有り様を描出し、その瀑布は銀河が天から落ちているかのような絶景であると詠出した。類似する内容は「其一」にも読み取れる。「其一」の最初の二句は、

西登香炉峰　西のかた香炉峰に登り
南見瀑布水　南のかた瀑布水を見る

とあり、香炉峰と瀑布の位置関係を明示している。第三・四句は、

掛流三百丈　流れを掛くること三百丈
噴壑数十里　壑（たに）に噴くこと数十里

とあり、険しい山から流れ落ちる廬山瀑布の雄大さを表出している。「其一」において瀑布の長さを表す「三百丈」は「其二」で「三千尺」に換算（一丈＝十尺）されている。こうしてみれば、「其二」は「其一」の瀑布の描写を取り立てて、絶句四句で展開させたと言えよう。

李白は「望二廬山瀑布一」其二の結句で人間界の瀑布を天上の「銀河」に譬えて詠じることによって、起句にある神仙の世界の色合いを帯びる表現「紫煙」と呼応し、詩全体に神仙界の雰囲気を漂わせている。匡衡の「早夏観二曝布泉一」も李白の詩句を借用することによって、粟田障子絵の神仙界のような雰囲気を詠出しただろう。匡衡は障子絵の主人である道兼の身分を考えた上で、格調の高い李白の「望二廬山瀑布一」其二の結句を直接引用したのではないかと推測される。

二　和歌に見える「布引の滝」及び「瀑布」の詠作方法

瀑布を「銀河」に譬える表現方法は早くも日本に伝えられ、平安初期の漢詩文にも見られる。[15] しかし、その表現方法は李白の詩を通じて受容された確証がない。現存する平安朝漢詩文では、匡衡の「早夏観二曝布泉一」以外、李白の「望二廬山瀑布一」其二の結句と同様の発想を詠出した作品が見られない。一方、和歌にも「布引の滝」や「瀑布」（「滝」）そのものを詠む作品が多く見られる。これらの作品には、前述した李白の発想と類似する詠法が見られるかどうかについて確認しておきたい。

「布引の滝」を詠んだ詠作は在原業平（八二五～八八〇）の『伊勢物語』（平安初期成立）が最初であると考えられる。『伊勢物語』第八十七段[16]には、

むかし、おとこ、津の国むばらの郡、芦屋の里にしるよしして、いきて住みけり…このおとこのこのかみも衛府の督なりけり。その家の前の海のほとりに遊びありきて、いざ、この山のかみにありといふ布引の滝見に登らん」といひて、のぼりて見るに、その滝、物よりこと也。長さ二十丈、広さ五丈ばかりなる石のおもて、白絹に岩をつつめらんやうになむありける。…そこなる人にみな滝の歌よます。かの衛府督まづよむ。

わが世をばけふかあすかと待つかひの涙の滝といづれ高けん
あるじ、次によむ。
ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに
とよめりければ、かたへの人、笑ふことにや有りけん、この歌にめでてやみにけり。

とある。在原業平が「津の国」に住んでいた頃、「衛府の督」である兄在原行平（八一八～八九三）を含め、多くの人が布引の滝のもとに集まり、歌を詠みあったのである。物語の中では、「布引の滝」は長さ二十丈（六十メートル弱）、広さ五丈（十五メートル弱）、白絹のように岩を包んで流れ落ちていると描出されている。「布引の滝」の有り様についての描写は、前述した「夏衣」「千尋」「さらす」などの語を詠み込んだ恵慶法師の和歌を想起させるだろう。「布引の滝」を目の前にし、在原行平はその高さに注目し、「世の中は自分の思いのままになるのが今日か明日かと、待つかいもなく流れ落ちる涙の滝とこの滝とどちらが高いだろうか」と詠じ、栄えていない自分の不遇を漏らしている。一方で、在原業平の一首は、瀑布の飛沫を白玉に譬え、瀑布を狭い袖に喩え、狭い袖で白玉を受け取ることができないように、瀑布の飛沫も絶え間なく飛び散っている、との意を詠出している。瀑布の飛沫を白玉に譬える在原業平の表現方法は後の和歌作品にも見られる。[17]

また、『古今和歌集』所収の橘長盛（生没年不詳）の詠作は、

朱雀院帝、布引の滝御覧ぜむとて文月の七日の日、おはしましてありける時に侍ふ人々に歌よませ給けるに、よめる
九二七　主なくてさらせる布を織女にわが心とや今日はかさまし
橘長盛

とあり、「布引の滝」の「布」にかけて、「布引の滝」を持ち主のない布と見たてて詠んでいる。詞書によると、この一首は七月七日、すなわち七夕に詠まれたものである。したがって、橘長盛は機織をする「織姫」のことを連想して「布引の滝」の「布」を詠み込んだと考えられる。前述した孫綽の「遊二天台山一賦序並」をはじめとする中国の詩文の影響を受けたと考えられる表現方法は和歌でも数多く見られる。

「布引の滝」を詠む平安中期の和歌の例として、『続古今和歌集』所収の藤原輔親（九五四～一〇三八）の詠作、

水上はいづこなるらん白雲の中より落つる布引の滝

が挙げられる。藤原輔親は「布引の滝」が白雲の中から流れ落ちる有り様を描写し、白雲と関連して「布引の滝」を詠じた。

一方で、平安時代の和歌集では、『金葉和歌集』までには、「瀑布」を「銀河」「天の川」と関連して詠じた作が見られない。平安時代後期に源俊頼（一〇五五～一一二九）によって編纂された『金葉和歌集』（一一二四年成立）[18]には、源経信が「布引の滝」を詠んだ一首の和歌が記されている。

宇治前太政大臣布引滝見に罷りけるともに罷りて
五三八　白雲とよそに見つればあしひきの山もとどろき落つる
激つ瀬

これは宇治前太政大臣藤原師実が「布引の滝」を見に行った時、源経信が同行して詠じた一首である。この一首でも、源経信は遠くから見れば「布引の滝」が雲ではないかと「雲」との関わりで詠じている。この一首の後に「詠み人知らず」の和歌が収録されている。それに注目してみたい。

五三九　あまのがはこれやながれのすゑならんそらよりおつるぬのびきのたき

詞書には「おなじ滝に罷りてよめる」とあることから、前首の源経信の一首と同じく、「布引の滝」を見て詠んだ和歌であることが分かる。この一首の意は、空から流れ落ちる「布引の滝」は「天の川」の末端に見紛うばかりとのことであり、明らかに「布引の滝」を「天の川」に見立てて詠じている。李白や匡衡の詩句に近い発想を詠出したが、恐らく作者は李白や匡衡などの詩人の詩句を踏襲して詠んだものであると推測される。

以上から見れば、和歌における「布引の滝」の描写方法としては、「滝」を「布」に見立てる方法や、空や白雲から流れ落ちる様子を詠じる方法など多様にある。しかし、『金葉和歌集』以前には、「滝」を「天の川」と結び付けて詠じた用例が見えない。漢詩文でよく用いられる詠作法は和歌に吸収されなかったと言えよう。

三　平安時代における李白詩文の受容

『日本国見在書目録』「別集家」に「李白歌行集三」と見えることから、李白の「歌行体」の詠作が日本にもたらされ、読まれていたことは確実である。日本における李白の「歌行体」の受容の例としては、筧文生氏[19]、仁平道明氏[20]らによって論述された、『伊勢物語』第二十三段の歌いだしの部分が李白の「長干行」の翻案であることが挙げられる。

この指摘を検討しておきたい。まず、『伊勢物語』第二十三段の歌いだしの部分と李白の「長干行」の冒頭部分を掲げる。

むかし、ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでてあそびけるを、大人になりにければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女もこの男を思ひつつ、親のあはすれどもきかでなむありける。[21]

長干行　　李白

妾髪初覆額、折花門前劇。
郎騎竹馬来、繞牀弄青梅。
同居長干里、両小無嫌猜。
十四為君婦、羞顔未嘗開。

長干行

妾の髪初めて額を覆ひ、花を折りて門前に劇（たはむ）る。
郎は竹馬に騎りて来り、牀を繞りて青梅を弄ぶ。
同じく長干の里に居り、両小（おさな）くして嫌猜無し。
十四にして君の婦と為り、羞顔未

低頭向暗壁、千喚不一回。　頭を低れて暗壁に向かひ、千たび喚ぶも一たびも回らず。
十五始展眉、願同塵與灰。　十五にして始めて眉を展べ、願ふらくは塵と灰とを同じくせんと。

『伊勢物語』第二十三段の歌いだしの部分と李白の「長干行」の冒頭部分はともに愛しあう男女の幼少時の姿を描写している。筧文生氏は『伊勢物語』の「井のもと」は、井戸の地上部分に設けた円筒状あるいは方形の囲み、すなわち「井牀」、「井筒」の意であり、それは「長干行」の第四句「繞レ牀弄二青梅一」の「牀」に依拠する表現であると指摘した。仁平道明氏は筧文生氏の論考を受け継ぎ、「ゐなかわたらひしける人」は「行商をなりわいとする人・田舎で暮しを立てていた人」の意であり、中国南京付近にある行商人の町である「長干」を詠み入れた李白の「長干行」の第五句「同居二長干里一」に依拠したことなどを指摘し、『伊勢物語』と李白の「長干行」の対応関係を明らかにした。なお、日本最初の仮名日記である紀貫之の『土佐日記』も李白の絶句の影響を受けていたと萩谷朴氏が指摘している。[22]『土佐日記』（九三五年頃成立）十二月廿七日（大津～鹿児崎～浦戸）の条には、土佐から都へ帰る紀貫之が鹿児崎を出発しようとする時、見送りに来た人達は海辺で足拍子で歌を歌い、留めてくれた場面を描いている。見送りの人たちに対して、彼は、

さおさせど　そこひもしらぬ　わたつみの　ふかきこころを　きだ嘗て開かず。
みにみるかな[23]

と歌を返したのである。この歌については、萩谷朴氏は李白の絶句「贈二汪倫一」の転句、結句、

桃花潭水深千尺　桃花潭　水　深さ千尺
不及汪倫送我情　汪倫の我を送るの情に及ばず

から直接発想を得ていたと指摘した。

一方で、和文だけではなく、漢詩文においても、李白の受容を確認できる詠作が見られる。平安時代の漢詩文における李白の受容については、小島憲之氏[24]、大野実之助氏[25]の論考が見られる。小島憲之氏は平安初期の勅撰漢詩集所収の詩文と中国文学とのかかわりを考察する中で、李白の詩文の影響を指摘した。小島氏は嵯峨天皇の「清涼殿画壁山水歌」と李白の「当塗趙炎少府粉図山水歌」とはいずれも画賛であることや語句の類似性を明らかにし、また、菅原清公の絶句「奉二和塞下曲一」の起句「天山秋早雪花開」が、李白の「塞下曲六首」其一の第一・二句「五月天山雪、無レ花只有レ寒」に類似すると指摘した。これらの類似表現によっても、李白の詩作の受容が確認できると言えよう。

また、李白の詩句は匡衡の祖父維時が唐代の詩人の秀句を選んで編纂した秀句集『千載佳句』にも見られる。『千載佳句』には李白の対句二首が入集している。その二首は、

玉階一夜留明月　玉階　一夜　明月を留め
金殿三春満落花　金殿　三春　落花に満つ　（「瑞雪」）

三山半落青天外　三山半ば落つ　青天の外
二水中分白鷺洲　二水　中分す　白鷺洲　（「題二鳳台亭子一」）

である。「瑞雪」は現存する李白の詩集に見えないが、「題二鳳台亭子一」は「登二金陵鳳凰台一」という詩題で収録されている。維時が李白の詩文のどのようなテキストを見たのかは不明である。ただ、そのテキストは大江家の家学として匡衡の代に伝えられたのではないかと推測される。匡衡が自伝というべき「述懐古調詩一百韻」（『江吏部集』第七十八番）の中で、祖父維時に儒者としての人生方向を導かれたことを述べたことより、彼が祖父から多大な影響を受けたことが分かる。[26] 李白の詩文にしても、匡衡が祖父以来の家学によって受容したのではないかと考えられる。

四　匡衡における李白詩文の受容

李白の「望二廬山瀑布一」其二をはじめとする詩はどのように日本に伝えられたのだろうか。李白の詩文集については、彼が生きていた時期に魏顥が編纂した『李翰林集』二巻、臨終の際に李陽氷に託して作らせた『草堂集』十巻、宋代初期楽史が編集した『李翰林集』などがあるが、いずれも現存せず、日本に伝わった記録も見えない。陳尚君氏の考察によると、敦煌遺書ペリオ二五六七に李白の詩が四十三首収められ、李白詩集の初稿を反映している可能性がある。[27] ただ、敦煌遺書と同じ内容を示す写本が日本に伝えられたかどうかは不明である。現存最古の李白の詩集とされる宋蜀刻本『李太白文集』は時代的には成立が遅れているため、匡衡が見た可能性は低い。おそらく匡衡は維時が『千載佳句』を編纂した時に目にした李白の詩集を見ていた。彼は、李白が度々「銀河」に見立てて詠んだ「瀑布」詩、とりわけ「望二廬山瀑布一」其二を鮮明に記憶し、「早夏観二曝布泉一」の詠作時に想起したと推測される。

匡衡の詩文には、「早夏観二曝布泉一」以外に、李白の受容と認められる詠作があるのだろうか、それについても検討してみたい。彼の「述懐古調詩一百韻」も前述した李白の「長干行」の作風の影響を受けたのではないかと考えられる。「述懐古調詩一百韻」の冒頭に、

優遊何所詠、身上旧由縁。　優遊して何を詠ずる所ならん、身の上の旧き由縁。
七歳初読書、騎竹繫蒙泉。　七歳にして初めて書を読み、竹に騎りて蒙泉に繫ぐ。
九歳始言詩、挙花戯霞阡。　九歳にして始めて詩を言ひ、花を挙げて霞阡に戯る。

とある。この一首は匡衡が年齢順に「身の上」を述べた百韻の詩作である。年齢順に自分の生い立ちを告白する詩文の詠じ方は前掲の「長干行」の詩句にも見られ、古くから中国の楽府詩によく用いられる表現方法である。匡衡は詩文で幼少時の遊びとして「騎レ竹」「挙レ花」を挙げていた。堀誠氏によると、「騎レ竹」は竹馬に騎る意であり、「騎レ竹繫二蒙泉一」とは読書を習いはじめたばかりで、竹馬に騎ってはいまだ童蒙の世界に繫がっている意という。[28] 花を折って遊ぶこと

と竹馬に騎ることを対で詠じるのは、前述した李白の「長干行」の冒頭に、

妾髪初覆レ額、折レ花門前劇。
郎騎二竹馬一来、繞レ牀弄二青梅一。

と見られる。「長干行」では、幼なじみの男女は幼い頃、少女が花を折って遊び、男子が竹馬に乗って少女と井戸の周りで遊ぶことを詠出した。匡衡がそれを踏まえて、表現を「挙レ花」と「騎レ竹」と書き換え、自分の幼少時の遊びとして挙げたのだろう。

おわりに

以上、匡衡の粟田障子詩第五首「早夏観二曝布泉一」を見てきた。この一首には白居易、菅原道真、李白の詩文の影響を受けた痕跡が見られる。匡衡が李白の詩句をほとんどそのまま自分の詩作に詠み込んだことは、彼が李白の近体詩を読んでいた証左である。彼が李白の詩文に接したのは大江家の家学の伝承によるものではないかと考えられる。匡衡の「早夏観二曝布泉一」詩は、結局道兼の粟田山荘の障子絵の賦詩に選ばれたかどうかは不明である。李白の詩句を襲用した中国的スケールを有する匡衡の斬新な所詠は果たして共感を獲得できただろうか。

李白の詩文は男性文人の手による仮名文学作品にも受容や翻案の痕跡が見られる。匡衡の二例の詩作によっても、限られた範囲ではあろうが、平安時代の文人が李白の詩想や表現を深く吟味し、見事に自分の作品に融合した事実を検証し得ると言えよう。

注

(1) 連作の題下注に「粟田障子作十五作其〜」などの表現により、匡衡が連作を十五首賦したことが分かる。現存する匡衡の粟田障子詩は「其十」「其十三」が欠けているが、「其十二」が二首ある。

(2) 山中裕校注『栄花物語』(新編日本古典文学全集33、小学館、一九九八年三月)巻三「さまざまのよろこび」には、「姫君十六ばかりにおはします。やがてその夜の内に女御にならせたまひぬ…かやうの事につけても、大納言どのはいとうらやましう女君のおはせぬ事をおぼさるべし。粟田といふ所にいみじうおかしき殿をえもいはず仕立てて、そこに通はせ給て、御障子の絵には名ある所々をかゝせ給ひて、さべき人々に哥よませ給。世中の絵物語は書き集めさせ給。女房数知らず集めさせ給ひて、ただあらまし事をのみいそぎおぼしたるも、おかしく見奉る」とある。

(3) 林羅山・林鵞峰が撰修した『続本朝通鑑』正暦五年(九九四)八月の条に、「道兼築別荘粟田。巨麗驚目、館中四壁、画名山水、請歌伯題詠之。房中佳人無数。請菅輔正、撰当時詩人秀作、書於障子」とある。

(4) 『拾遺集』「神楽歌」に平佑挙の「みそきするけふからさきにおろすあみは神のうけひくしなしなりけり」が収録され、詞書に「粟田右大臣の障子にからさきに祓したる所にあみひくかたける所」とある。匡衡の和歌「もちつきのうつれるほどをみる人やいひはじめけむたまの井の水」は和歌集『匡衡集』に収載され、詞書には「玉の井といふ名所絵 といふ、そのなかけるを」とある。

(5) 『本朝麗藻』には、「海浜神祠(住吉社)」「題二玉井山庄一(在二和泉一国一云々)」を題とする藤原為時の詩作、『和漢朗詠集』には「田家秋意」を題とする紀斉名と高岳相如の詩作、『新撰朗詠集』には「嵯峨秋望」を題とする藤原為時と高岳相如の詩作、『和漢兼作集』には「春遊原上」を題とする藤原為時の詩作が見える。それぞれ『江吏部集』の「海浜神祠(粟田障子十五首其八)」(〔五〇〕)、「題二玉井山居一(同作中其十四)」(〔四六〕)、「田家秋音(同作中其十二)」(〔四七〕)、

「嵯峨野秋望同作中其九」（〔三三〕）、「春遊原上粟田障子作。十五首中其四」（〔三一〕）に対応している。

（6）熊本守雄氏「粟田山庄障子絵と和歌と漢詩―恵慶集と江吏部集―」（『国語国文学43、東京大学国語国文学会、一九六七年七月）。木戸裕子氏「大江匡衡　粟田障子十五連作」（『文獻探究』27号、一九九一年三月、29号、一九九二年三月）、「粟田障子詩考」（『語文研究』九州大学国語国文学会、一九九二年六月）を参照。

（7）詩題にある「曝布泉」は『江吏部集』『群書類従』本のテキストに従う。『江吏部集』山口県立図書館本、石川県立図書館蔵見林本、京大本、内閣紅葉山本などには「瀑布泉」とある。中国の詩文には「曝布泉」が見られず、張九齢の詩題「湖口望二廬山瀑布泉一」、白居易の詩句「繚綾繚綾何所似、不似羅綃與紈綺。応似天台山上月明前、四十五尺瀑布泉」（「繚綾」）などが挙げられる。「瀑布泉」の類似表現としては、「瀑布水」「瀑水」「瀑泉」などが見られる。匡衡の一首の訓読や解釈は木戸裕子氏「大江匡衡　粟田障子十五連作」（『文獻探究』27号、一九九一年三月）を参照。

（8）川村晃生・松本真奈美『恵慶集注釈』（貴重本刊行会、二〇〇六年十一月）を参照。

（9）藏中しのぶ氏「題画詩の発生―嵯峨天皇正倉院御物屏風沽却と「天台山」の文学―」（『奈良朝漢詩文の比較文学的研究』翰林書房、二〇〇三年七月）を参照。

（10）菅原道真の詩作番号や注釈は川口久雄校注『菅家文草　菅家後集』（日本古典文学大系、岩波書店、一九六六年）を参照した。

（11）李白の詩句は現存最古の李白文集宋蜀刻本『李太白文集』を底本として引用した。

（12）『宋本李太白集』、『静嘉堂蔵宋本李太白文集』などには、詩題は「望二廬山香爐峯瀑布一」とあり、起句、承句は「廬山上與二星斗一連、日照二香爐一生二紫煙一」に作るテキストもある。

（13）現存最古の李白文集宋蜀刻本『李太白文集』には「長川」となっているが、『全唐詩』『王　琦集注李太白文集』『分類補注李太白詩』などには「前川」となっている。ここでは、宋蜀刻本『李太白文集』に従う。敦煌遺書には李白の詩文が見られ、李白の詩文の原貌に近いと言われるが、「望二廬山瀑布一」其二が見られない。

（14）宋蜀刻本『李太白文集』、『早稲田大学蔵宋本李太白集』の校記によると、結句「疑是銀河落二九天一」は「疑是銀河落二半天一」となるテキストもある。

（15）現存する平安初期の漢詩文の使用例としては、嵯峨天皇（七八六～八四二）の「和下良将軍題二瀑布下蘭若一簡二清大夫一之作上」（『経国集』）の頷聯「空堂望レ崖銀河発、古殿看レ溪白虹臨」が挙げられる。

（16）テキストの本文や注釈は日本古典文学大系『伊勢物語』（岩波書店、一九五七年十一月）を参照。

（17）例としては、紀貫之の「滝つ瀬もうきことあれやわが袖の涙に似つつ落つる白玉」（三〇九『貫之集』）などが挙げられる。

（18）注釈は久保田淳監修『和歌文学大系34金葉和歌集』（明治書院、二〇〇六年九月）を参照。

（19）筧文生氏「〝繞牀〟考―李白「長干行」ノート―」（『立命館文学』第三八六・三八七・三八八・三八九・三九〇号、一九七七年十月）を参照。

（20）仁平道明氏「『伊勢物語』二十三段と李白「長干行」」（『文芸研究』一〇〇、日本文芸研究会、一九八二年五月）を参照。

（21）この一段の意味は、昔、田舎暮らしをしていた人の子供たちが井戸のそばに出て遊んでいた。大人になって、男も女も恥ずかしがっていたけれど、男はこの女をぜひ妻にしたいと思う。女もこの男を思い続けていたので、親がほかの人と結婚させようとするけれど、聞き入れないでいた、とのことである。

（22）萩谷朴氏『土佐日記全注釈』（角川書店、一九六七年八月）を参照。

（23）この一句は棹をさしてもそこが知れない深い海のように、あなたがたの深い情を感じている、との意である。

（24）小島憲之氏『上代日本文学と中国文学―出典論を中心とする比較文学的考察―（下）』（塙書房、一九六八年三月）を参照。

（25）大野実之助氏「平安漢詩と李白」『国文学研究　第九・十輯』（早稲田

大学国文学会、一九五四年三月）を参照。

(26) 「述懐古調詩一百韻」には、「十三加元服、祖父在其筵。提耳殷勤誡、努力可攻堅。我以稽古力、早備公卿員」とあり、匡衡の元服の儀式で、維時は匡衡が帝師となる相があるため、必ず聖主に起用されると、勉学を励ます言葉を贈り、彼の人生に指向をもたらしてくれたのである。

(27) 陳尚君氏「李白詩歌文本多岐状態の分析」『学術月刊』（上海市社会科学連合会、二〇一六年五月）を参照。

(28) 堀誠氏「日中『竹馬』小考」『２０１６和漢比較文学研討会論文集』（和漢比較文学会、二〇一六年）を参照。